

ラジオをお聴きの皆様は、黒沢明監督の『生きる』という映画をご存知でしょうか？

真面目なだけが取り柄の市役所勤めの男が、不治の病に^{おか}冒され余命が限られていることを知ります。妻にはすでに先立たれており、唯一の息子には死の淵に立つ苦しみを理解してもらえません。一時、絶望の日々を送りますが、自らの人生を見つめ直すきっかけを得て、わずかに残された人生の時間を市民のために費やそうとします。

そして市民の要望であった公園造りを人生最後の仕事と決意し、死にものぐるいで取り組みます。そしてようやく公園を完成させることができた晩、公園のブランコに乗って『ゴンドラの唄』を歌うのです。

「いのち短し 恋せよ少女 朱き唇 褪せぬ間に
熱き血潮の 冷えぬ間に 明日の月日は ないものを」

そして、彼は^{いき}息を引き取るのです。

この映画の底^{ていりゅう}流には、「無常」というこの世の道理が流れているように感じます。「無常」とは、この世のありとあらゆるすべての存在や現象は常^{つね}ならざるものであるという、仏教の教えの一つです。

この「無常の道理」は、実はとても古くから説かれ続けてきました。有名な『平家物語』は、

「祇園精舎の鐘の声 諸行無常の響きあり
沙羅双樹の花の色 盛者必衰の理をあらわす……」

この世は、ありとあらゆる存在が常に変化の中であって、一瞬たりとも同じ状態^{とど}で止まるとはいない……と物語が始まるのです。

仏教にとってこの無常の道理は、とても重要な位置を占めています。道元^{どうげん}禅師は著書『学道用心集』の一番最初に、

「世の中は常に変化をしていて、命あるものは、いつか必ず死を迎える。そんな現実から目を逸らさないこと、それが仏教を信じる者の覚悟である。欲望^{かな}を叶えることに成功し、豊かな富や得がたい名声を得たとしても、死を迎えた時には、それらはほとんど役に立たない。今という時は二度と来ないから、修行を^{おこた}怠ってはならない、常に精進^{しょうじん}しなさい。」とお示しです。

無常という人生を生きている私たちが、今日というこの日を迎えることができたのは、当たり前のことではありません。私たちは幸いなことに、目には見えないかもしれないけれど、さまざまな条件が幾重いくえにも折り重なって今日を迎えることができたのです。

だからこそ、今日という日を大切に、十分に味わって過ごしませんか？
今日という日が、誰にとっても掛け替えのない一日となりますように……。

— 終 —